

「^{ほうげじゃく}放下著」：捨ててしまえ

寺子屋プロジェクト和尚の話 第19回：「^{ほうげじゃく}放下著」

今回は「放下著」についての話です。「放下」とは「捨てる」の意味で、「著」はそれ自体に意味はなく命令形を強めるためのものです。つまり「捨ててしまえ」という意味です。

松原泰道師は、釈尊が29歳でシャカ国の皇太子という社会的地位も妻子も捨て難行苦行に入った後、35歳で苦と楽、迷いと悟りとの対立観念にたつ難行苦行の相対的知識も捨てたことを述べ、また夏目漱石の「草枕」の有名な一節を引いて知や情、意地の相対的な計らいを放下しないと、心の自由は得られないと解説しています。

「放下著」の言葉は、その昔、中国唐の趙州和尚に巖尊者という修行者が質問します。「一物不将来の時、如何に」一何もかも捨てて、手ぶらのときはどうしたらいいのですか？—に趙州和尚が答えたものです。

修行者は一捨ててしまえと言われても手ぶらで何ももっていない—と食いだがりまます。趙州和尚は—それならそいつを担いでゆけ—「何も持たぬというその意識をも放棄せよ（“担いでゆけ”は反語）」と、放下の放下を指導します。

エリートの道を捨てて俳句の道に生きた尾崎放哉の句—「持ちきれない荷物の重さ前後ろ」を引用しながら、松原師は「私たちはいつも何かを担いでいます」といいます。

生きていく中で、人生のいろいろな荷物を担いで行くことは、自分という存在の意味を「何かに依存する」ことでもあります。

私たちは身・口・意を通して三毒(貪・瞋・痴)を作りだして一生を生きていくのですが、その煩惱のシステムのスタートを「智度論」は「我心から我所へ、そして我所心へ」と連続して生じる偏った考え方に囚われる事であると説いています。

依存は物に限りません。法においても仏においても、囚われた考え方は、依存した生き方を作り出してしまいます。それは、苦に繋がります。

放下しきった、何ものにも束縛されない、そういう人を臨済禅師は、「無依の道人」と呼んだのでしょ

う。禅師は「真正の修行者は、決して仏を認めず、菩薩をも阿羅漢をも認めず、この世の有り難そうなものなど一切問題としない。そんなものからはるかに超越して、外の物にかか

ずらわれない」ことは、しかし簡単ではありません。

次の話はその例です。「昔、3人の修行僧が旅にでます。途中、増水した川岸で難渋する女性をみかけ、修行僧のひとりがその女性を抱きかかえて向こう岸に渡します。しばらく歩くうちに修行僧の一人が、女性を抱きかかえて渡した僧に対して『仏に仕える身でありながら、女性を抱きかかえるとは』と難詰します。それに対して、当の修行僧が答えます。『お前さん、私は川を渡ったところで女性を下してきましたよ。貴僧は、女性をまだ抱いてるではありませんか。早く下ろしてしまいなさい』と」

私たちは、外の物と関係しないでは「生きる」ことができないのは、水や空気

の自然、仕事や日々の暮らし、家族や社会との関係を考えてみれば明らかです。煩惱のシステムによって、外の物との関係が私たちの心に纏わりつき、「心の自由」を奪ってしまっているかもしれません。それを松原師は「人生は旅・旅に荷物はつきもの」であり、「私たちが一生の間につくり続けた、身体と口と意(こころ)の荷物は、善かれ悪しかれ、人生の終着駅まで担がねばなりません。誰も分担しないことを思い知らねばなりません」と述べ「随処に主となるのが『放下著』です」としています。

先代の住職が昨年遷化いたしました。87歳でした。最後に残した書が「捨一」(一を捨てる)でした。自身で掛け軸にまで仕上げしており、葬儀の際は、その掛け軸を荘厳の中心にさせていただきました。

「捨一」は、先代住職の遺言のようなものと私は受け取りました。

「一を捨てる」、人生の最後に、残る捨てるべき「一」とは、何だったのだろうかと考えてしまいます。

私も63歳になっています。人生の最後の周回を迎えているものと覚悟しています。身や心から、徐々に削げ落ちていく諸々のものがあるという現実を受け入れていかなくてははいけません。

自ずと削げ落ちた現実を受け入れて、「有ると思うな、無いとも思うな。放下著」と現実を受け入れるキーワードとしてみるのも一興かもしれません。

(文責 中村彰利)